

沖

俳句雑誌[おき]

1
月号

沖
発行所

昭和65年2月1日 第3種郵便物認可
平成20年1月1日発行 毎月一回 1日発行
俳句雑誌 沖 第30巻第1号

寒の潮

能村 研三

一茶のふるさと

十一月十九日は一茶忌だが、長野県の信濃町で行われた一茶忌の俳句大会に講演を頼まれ出席した。

この会には、かつて先師登四郎も呼ばれて講演したそうで、親子二代で呼ばれたのは大変光栄なことであった。

黒姫のホテルで前夜祭の句会があり、前日から来てほしいとの事であった。

ちよと昼に長野駅に着いたが、東京とはうって変わって時雨れていた。吟行会には「沖」から藤森支部長と小林久雄さんが参加してくれた。

吟行バスは大型二台でほとんどが地元の方であったが、テレビの「風林火山」でブームになっている、川中島の八幡原古戦場跡と一茶がふるさとを発つ時父親が送ってくれたといわれる牟礼の三本松の行人塚を吟行した。この後、バスは山道を登り宿の黒姫に近くなる頃から霧が降り出した。東京では暖冬が続き、近年は雪景色からは遠ざかっていたので、久しぶりの景色であった。バスがホテルに着く頃は瞬く間に相当の積雪量となり、さすがに一茶が「雪

合戦の陣形跨ぐしぐれ虹

檜葉くべて焚火一氣に加勢せり

一茶忌や笙を温めし朱の火鉢

一川の真水をそそぐ寒の潮

耕二忌の黒千代香で酌む爛焼酎

巻藁の新藁匂ふ弓道場

冬野凧ぎ訃報一斉メールかな

数へ日の回覧板はすぐ回り

狐火に危機管理マニュアル覗かれし

武雄忌の爛一合の蕎麦屋酒

五尺」と言ったのが頷けた。
翌日の講演では、一茶は松戸や流山など千葉県に長く逗留したこともあり、真間山にも何回か訪ねて、市川にも句碑が二つあることなども紹介した。

ところで一茶は江戸から房総付近にかけて旅をしながら俳句を読み続け、何カ所か立ち寄り先にしていたところがあることは知られている。中でも馬橋の大川立砂、流山の秋本双樹、上総富津の女流俳人・織本花嬌などの交流は有名。そんな訳で大会には信濃町と姉妹都市の緑で流山からも多くの俳人が出席されていた。

講演には、茅野から勝田公子さんをはじめ多くの会員が聴講してくれたが、かつて「沖」の支部長を務めた湯本道生さんにもお会いすることが出来てとても懐かしかった。

能村 研三



初あかり

林 翔

日の丸

先づ見ゆる沖の一舟初あかり

吸ひ初めや無限の空へ小紫烟

鉄橋を渡る楽添へ暖房車

雪塊の数は車数か駐車場

「国旗イ——旗竿オー——」と声高らかに売り歩く商売が、戦前・戦中には有ったのだが、敗戦後には勿論無くなった。戦前・戦中に国旗を掲げたのは、主として四大節である。元は三大節と言い、元日・紀元節・天長節であったが、後に明治節が加えられて四大節になった。紀元節は2月11日で建国の日、天長節は天皇誕生日、明治節は11月3日で明治天皇の誕生日、今は文化の日となっている。

敗戦後も、講和条約が締結されてからは国旗を掲げてもよいことになったのだが、官公街を除いて一般の民家では、祝日にも国旗を掲げる家は殆ど無くなった。

わが家の近所でも、国旗を掲げるのは某家と林家の二軒だけであったが、その内に某家でも掲げなくなつて、林家だけになってしまった。しかし林家の旗竿も、ぼろぼろになつ

綿虫や小さき天地を倦きもせず

木犀の散らすこがねよ苔の上

火の中に生きゐる我か庭紅葉

桜もみぢふはりと句碑へ供へ物

月仰ぐ眼のみ健やか他は病めり

学び舎にも古稀はありけり天高し

祝市川学園七十周年

て今にも折れそうである。

運命の日——と言つては大袈裟だが、或る祝日に国旗を立てようとした時、旗竿の上に付ける金色の玉を落として割つてしまった。はつとしたはずみに旗竿も折れてしまった。こうして、「右翼」とひやかされながら掲げ続けた林家の国旗も、筆筒の抽斗に眠るだけになつてしまったのだつた。

昭和44年の夏、私は連休を利用して飛騨高山を訪れた。小高い丘の上から平地の村落を見下ろした時、私は眼を疑い、そして感動した。村落のどの家にも日章旗が翻つていたのである。

林 翔



蒼茫集



始発駅

安居正浩

湖へとも空へともなく秋の虹
蔦紅葉芭蕉の墓に慕ひ寄る
風出でてとんぶり淡き味したり
青空を斬れば血となる葉鶏頭
始発駅冬の匂ひの寄せてくる
思ひ出は師の含羞と吉野葛

湖 国 北川英子

眠らずに待ち呉れしかな比良比叡
大津絵の鬼抱き歩くしぐれ傘
飴とろと仕上げ湖国の冬支度
青北風や纜きしむ音に暮れ
凧の指す方へ方へと月の道
鴨来ると湖北に路通ちらちらす

各駅停車

淵上千津

神事釜すゑて堅田の秋しぐれ
晩年の各駅停車冬もみぢ
膝掛けや生涯正座たりし師よ
野紺菊寄る辺少なき人見舞ふ
稲光り雷同をこそ惧れけり
燦然と月下の湖を船しずか

冬はじめ 吉田陽代

冬はじめ翹休めるに似て帰省
気配して厨の窓に望の月
霜月や白の記憶のこの地去る
夫の待つ地へ帰りきぬ石路の花
夫と挽ぎし日のありありと柿日和
湯加減を聞かざる湯浴み冬灯

凧の底 辻美奈子

凧の底の坂東太郎かな
鹿ほどにとほき目をしてみどりごよ
櫛ひとつ用済みにして冬に入る
転んでは泣くに間のある花八つ手
赤ん坊に赤ん坊の役聖夜劇
守備範囲やや広うして年逝かす

寄り道 千田百里

寄り道てふ十一月の過し方
率ゐるはモーゼか帰燕ひたすらに
石山を訪ひそこねしも膳所の月近江四句
あはうみの戦史哀史や秋の魼
秋気満つ竹生古刹の舟廊下
大勢の去りし義仲寺荻のこ糸

喝 千田 敬

天高し沙幕囲ひに鑿の音淡海三句
淡海を蹴つて満月伊吹嶺へ

神渡し水皺は湖の喜色とも
朝寒や六腑に喝の酸素水
十五夜の水門肩を怒らせて
あをぞらへりんごの皮の螺旋階

晩鐘 吉田政江

晩鐘を撞く太綱の露じめり
叡山の露や阿闍梨の捨て草鞋
唐崎の松越しの帆や秋の虹
夕暮れは風をあふれて紅葉茶屋
露時雨昼を灯して式部の間
釣瓶落しまだ干されゐる柔道着

無言館 森岡正作

冬うらら膝笑はせて山寺へ
新走り四股名の如く並びをり
不破の関色なき風に紛れ越ゆ
無言館の空を画せる冬紅葉
冬の鴟一声奔る無言館
画学生の三倍も生く冬紅葉

潮鳴集



水の近江

宮内とし子

卵白の泡の膨らむ豊の秋
釣舟を墨絵の中に日の短か
稽田の青さは水の近江かな
芭蕉花穂垂れて古井に竹の蓋
初しぐれ音なくひかる余呉の湖

親しき

三好千衣子

叡山は親しき高さ鳥渡る
扉を開けて初鴨待てり浮御堂
鳥渡る近江路なべて湖に沿ひ
世阿弥忌や銀漢こぼす遠流の地
からくりの木偶に秋思の袖袂

くわりんの実

服部早苗

ボクサーのやうな貌してくわりんの実
文化の日キリトリ線は折つてから
下読みに仮名ふつてゐる小六月
秋ともし生まれくる嬰の名を並べ
秋天をはるばる生まれきし赤子

黄落

大川ゆかり

秋日浴びて多面体となる体
水切の石の勢ひ雁渡し
星月夜グッピーの尾のせはしなく
黄落や止まらずに過ぐ停留所
しまうまのたてがみも縞ふゆうらら

『オルガン坂』(自選二十句)

安居正浩

かじる林檎アップルパイになる林檎
首隠すためのセーター誕生日
戸袋に何の明るさ一葉忌
夕暮がポインセチアの手前まで
恵方とはまつすぐにゆく子の新居
金柑をつれない甘さだと思ふ
合格子いま風となり鳥となり
朧夜の噛み応へある貝の紐
春雨や嬰が欠伸をする頃か



どこを踏んでもたんぽぽの明るさに
虚子の忌のゆるやかな水たぎつ水
一面の菜の花白白したくなる
学校が小さく見ゆる桜の実
葉桜のおもさは定年の重さ
還暦を過ぎたる水着干しにけり
少女色して日本のさくらんぼ
歳月は散る舟虫のやうなもの
断りは婉曲がよし鱧の皮
盆菓子の原色に父遠くなる
よく揺れてオルガン坂のねこじやらし

『炎帝』

(自選二十句)

大川ゆかり

風光るたてがみ強き対州馬
泳ぐとはゆつくりと海纏ふこと
けふ兎抱いたと言ふ子抱きしめる
田水張る山々を雲拭き上げて
ジェットコースター炎帝どこにゐる
月朧わたくしといふかたちかな
口中に動く舌あり花疲れ
かたつむり泣きたい時は殻に入る



日本に端居してゐる島暮らし
縦笛の穴は十一小鳥来る
春雪や紙の力士に紙の塩
春満月足裏つめたく眠りけり
背番号誠一郎へ15で終る君の夏
銀紙にくるんでみたき春愁は
噴水を戦ふ水と思ひけり
風は秋鳥のかたちの梵字かな
さざ波は鯨の尾より生れし波
紙折れば生まるる影や終戦日
ことはりもなく満月のついてくる

『孤島』

(自選二十句)

掛井広通

啓蟄や口の中から万国旗
春帽子置く言ひ出せぬこともおく
母とふたり夜桜少し見て帰る
シヤボン玉どの一室に我ゐるや
ドーナツの穴に立夏の空がある
ネクタイは彗星の尾よ夏はじめ
母の日と母に言はれてしまひけり
観覧車夜空の泉汲んできし
亀生るる眼は小さき海なりし



死はいつも我ではなくて雲の峰
太陽の飛沫ぷちぷちプチトマト
名のつきし頃より一人静かなり
白露の生まるるほどの目覚めかな
秋の日や動く歩道の横歩く
太陽ははるかな孤島鳥渡る
石は石の事を思へり秋の暮
雪うさぎ月のうさぎに恋をして
鯉は緋を沈めて寒に入りけり
曲線はどこに集まる冬林檎
生命線の今どのあたり年迎ふ

年間二十句

主宰選

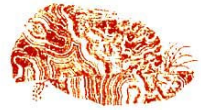
小嶋洋子

地下鉄に息つぎありぬ冬銀河
永遠の冬あり恐竜の展示室
東京の鬼門封じや枯蓮田
雪吊に奏でて見たき百の弦
展望室雪の孤島となつてをり
標的となるかもしれぬ枯野行く
天窓から黙示のやうな冬日かな
泡のまま乾く石鹼春浅し
気泡めく硝子の春のエレベーター



春の闇つなぎ回送列車かな
レインボーブリッジあやとりのかたち
万緑や黒光りする大腿筋
ふいに父のポマードの香や青時雨
鍬形虫の闘ふときの無重力
インターホンとれば激しき梅雨の音
ハンカチを巾着にしてもらふ菓子
男踊とは世の風を斬るやうに
コスモスや自然消滅てふ別れ
糊しろのやうなる九月尽きにけり
柚子青く匂ふこれからこれからと

沖作品



式部の間紅葉襲の日の中に
秋思なほ關伽井屋に涌く水音にも
湖小春松は添木に身を委ね
葡萄食べ二粒ほどの恢復期
種採れば日差しそのままミレーの絵
青柚子の強がりばかり言ふかたち
秋灯の膨らむカーブミラーかな
天高し砲台跡に新校舎
島の坂背負籠より柚子こぼれ
秋灯やふたりで居れば足るころ
初冬や自転車に注ぐ潤滑油
鎌倉に銭洗ひをり石路日和
一ひらの草書のやうに枯葉落つ
この神社何もなければ大冬木
縄飛びの輪に山並の加へらる
泣く嬰のこくりと釣瓶落しかな

市川市

諸岡 和子

東京

七種 年男

東京

齊藤 實

奈良

中坪 一子

能村研三選

杉箸の水平に割れ走り蕎麦
あやかに椎の実拾ふ幻住庵
彫り深き芭蕉の句碑に秋日影
烏瓜点り子の声一直線
わがままな眠気とをりて秋灯下
霧を来て少年はまた霧に入る
秋深むあふみの風に髪梳かれ
鯛雲関八州のとつばざれ
犬吠埼の地軸ゆさぶる野分波
晚鐘の一打一里に三井の秋
音もなき幻住庵の秋しぐれ
浜菊の岩へひねもす波の白
寸分の隙さへおかず石榴の実
冷まじや頭の中を撮られぬて
離りゆく人を咎めず龍の玉

市川市

宮島 宏子

千葉

座古 稔子

岩手

栗城 静子

沖作品 15句選評

*
能村研三

先師がよく「沖」の一月号のこの欄で、会員から同人を十人位送った後の空虚さを述べ、果たして今年もちゃんと巻頭を争える位の人たちが伸びてくれるのかと不安をもつて話していたことを思い出した。昨年「沖作品」で上位を争っていた人たちがそっくり十二人抜けたので、私も不安を感じますが、必ずや鎬を削るようになってくれるだろうことを期待している。

葡萄酒 食べ二粒ほどの 恢復期 諸岡 和子

諸岡さんは以前にも巻頭を取ったことのある方で今年は伸びてくれると信じている。掲出の句、肉親のどなたかが、大きな病気になるれ手術されたのであろうか。家族にとつては、一時はどうなるかと心配したが、少しずつ元氣を取り戻すようになってきたのが嬉しい。まだ患者食も食べられないが、たった二粒の葡萄酒を口にしてくれたことで病氣が恢復していることがわかった。他に近江での勉強会の句、三井寺で詠んだ「秋思なほ關伽井屋に湧く水音にも」の句も、關伽井から湧く不思議な音を捉え、秋思につなげたのも面白かった。

青柚子の強がりばかり言ふかたち 七種 年男

七種さんは、地方に家族を残し単身赴任を続けながら、句会に参加されていて、最近はその句会の数もだんだん多くなっているようだ。掲出の「青柚子」の句、柚子は寒さにも強く、実をつけるのに何年もかかるが、そのかわり寿命が長く病氣にも強い木だそう。皮肌はこつこつしていてまだ黄色に色づかない青柚子は何か強がりでも言っているかたちに見えた。

初冬や自転車に注ぐ潤滑油 齋藤 實

最近自転車を買えるせい、余り手入れをしないで雨ざらしにしていることも多い。昔は、ものを大切に考える考えが行き渡っていたので、自分の家でも自転車の手入れをよく潤滑油を注いだ。注油するだけでチェーンの動きが良くなった。冬に自転車に乗るのは辛いことだが、せめて少しでも動きやすくしておくことも生活の知恵なのだろう。

泣く嬰のこくりと釣瓶落しかな 中坪 一子

作者は奈良の方で、先日の近江の勉強会で掲出の句で良い成績を取めた。秋の日がたちまち暮れて行くのを、「釣瓶落し」というが、太陽が沈む速度は一定のはずなのだが、秋に限って何故すとーんと落ちるようになるのだろうか。今まで愚図って泣き続けていた赤ん坊が、まるで嘘のように静まりかえって眠ってしまったのだ。釣瓶落しという天文的な時間的経過の中で赤ん坊がすぐにでも寝付く垂直性が描かれていて面白い句とされた。(以下略)